

小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン

第1回 「授業のUDとは」

本連載のタイトルである「小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン（以下、UD）」について考えるにあたり、まずはベースとなっている「授業のUD」とは何かについて確認する。

◆授業のUDとは

授業のUDとは、

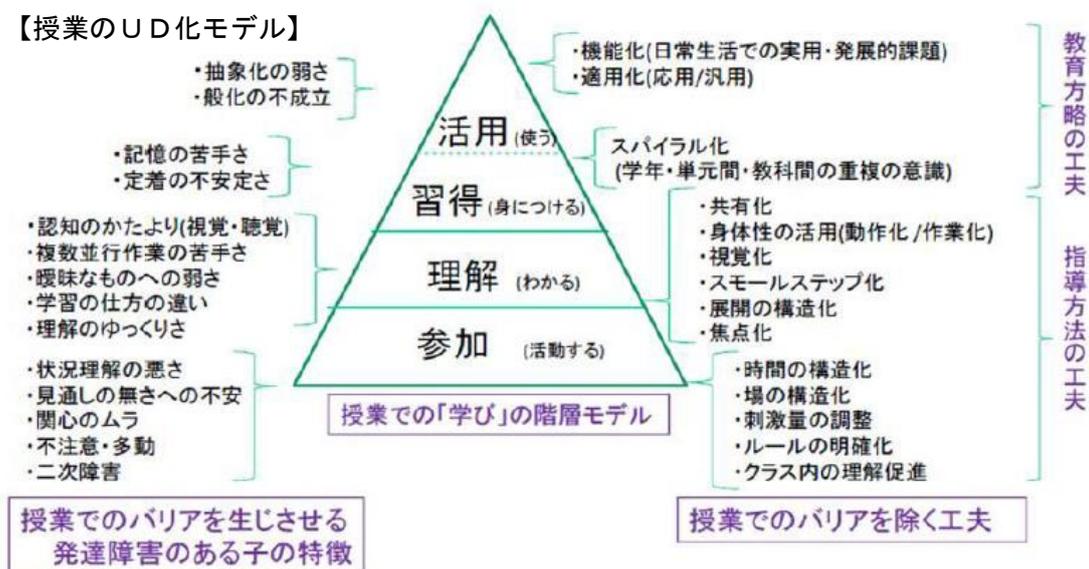
学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが、楽しく「わかる・できる」ように工夫・配慮された通常学級における授業のデザインである。

UDと聞いて、多くの人がイメージするのが、シャンプーボトルの突起。そもそもこの突起、目の不自由な方のためのデザインだが、そうでない方にとっても便利なデザインだ。困り感のある特定の方を含め多くの人にとって助かる便利な設計、それがUD。

「授業のUD」の考え方も、シャンプーボトルの突起の考え方と同じだ。これまでの授業では参加できなかったAさん、理解しにくかったBさんが、参加・理解しやすくなるように授業をつくる。さらにそれにとどまらず、二人以外のすべての子どもも、参加・理解しやすくなるように授業を設計する。そのような授業設計を、授業のUDと言う。

◆授業のUD化モデル

では、具体的には授業をどのようにデザインすればよいのだろうか。それを考える際に役に立つのが下の図だ。明星大学の小貫悟氏がまとめた「授業のUD化モデル」である。



簡単に説明する。中央の三角形には授業の四つの階層、「参加」「理解」「習得」「活用」が位置付けられている。三角形の左側には、「授業でのバリアを生じさせる発達障害のある子の特徴」が四つの階層別に挙げてある。例えば「理解」の階層では、認知のかたより、複数並行作業の苦手さ、気持ちや理由を問われることへの弱さなど、発達障害のある子どもにしばしば見られる傾向が、授業中の理解を困難にしていることを表している。三角形の右側には、左側のバリアを取り除く工夫、すなわち授業をデザインする際の視点が書かれている。例えば「理解」の階層では、「共有化」「身体性の活用（動作化や作業化）」「視覚化」「スモールステップ化」「展開の構造化」「焦点化」を視点にしながら授業をデザインすることが有効だということを表している。モデル図には四つの階層を通じて、全部で14の視点が想定されている。

ところで、左側のバリアは、発達障害のある子だけの特徴だろうか。違う。発達障害の傾向のある子ども、いわゆるグレーゾーンの子どものにも言えることだ。さらに言えば、どの子どもにも得手不得手があるので、すべての子どもが部分的に感じる可能性がある困り感だと言える。そのように考えると、右側の14の視点は、発達障害のある子どもだけにとどまらず、すべての子どもの参加・理解・習得・活用のしやすさにつながると言える。授業のUDと言われる所以である。14の視点から授業をデザインしていく、これこそ、授業のUDの具体でありポイントである。

以下、14のUDの視点を順に簡単に説明する。

【クラス内の理解促進】

失敗を許さない雰囲気では学び合いは成立しない。互いのよさの理解を促す働きかけが必要だ。

【ルールの明確化】

発表するとき、聞くときなど授業に参加するためのルールを決めておくと、子どもは安心して授業に参加できる。

【刺激量の調整】

教室内の掲示物や音などが、授業への集中を妨げることがある。授業中の妨害刺激を確認しておくことが必要だ。

【場の構造化】

教室には様々なものがある。それらが、決まった場所に機能的に置かれていることが必要だ。

【時間の構造化】

予定を「見える化」する。見通しがあると、どの子どもも行動をコントロールしやすくなる。

【焦点化】

授業が複雑だについてこられない子どもが増える。あれこれ狙わずに授業の内容を絞り込む。学習活動もシンプルにする。

【展開の構造化】

単元の展開，授業の展開を明確にし，論理的にある程度パターン化する。

【スモールステップ化】

授業の目標達成にむけて，学習活動や発問を細かくすることで，どの子どもも授業の中心場面に参加するのに必要な知識などを得ることができる。

【視覚化】

効果的に視覚的情報を使うことで，具体的に理解することが可能になる。

【身体性の活用】

言葉だけのやりとりでなく，身体を使うと理解が一層深まる。

【共有化】

互いの考えを伝え合ったり確認し合ったりする。理解が進んでいる子にとっては，自分の考えを深める機会となる。困っている子どもにとっては，自分の意見の不足分を補う機会となる。

【スパイラル化】

既習の学習内容を繰り返し復習することで，習得の深まりが得られる。

【適用化】

習得したことを別の学習や事象に転用させることで応用がきくようになる。

【機能化】

授業で学んだことを実用的に使えるようにする。

◆「授業のUD化モデル」を活用するにあたり

留意しておきたいことが二つある。

一つ目。このモデル図はあくまで現時点で積み上げられた全国各地の授業実践を整理・分析する中で見出されたことが描かれているにすぎない。今後の授業のUD研究の中で，視点が15, 16と増えていく可能性もあれば，逆に減る可能性もある。あるいは，今は一つの視点が細分化，精緻化されるかもしれない。いずれにせよ，このモデル図は今後，子どもの学びの姿をもとに我々教師が更新していくべきものであり，決して絶対視してはならない。

二つ目。授業をUD化する目的は，すべての子どもが楽しく「わかる・できる」ようにすることであり，共有化，視覚化などはあくまでもそのための手段である。このことを忘れ，授業をUD化すること自体を目的にすると，しばしば必要のない視覚化，教科の本質とは無関係の焦点化，必然性のない共有化などが行われることになる。これでは本末転倒である。授業のUD研究が加速度的に広がっている今こそ，特に注意したいことである。

今，授業のUD研究が各教科において広がりつつある。今回は，社会科授業のUDの概要について説明する。

【参考文献】

桂聖『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社 2011年

小貫悟「授業のユニバーサルデザイン化を達成するための視点」授業のユニバーサルデザイン研究会・桂聖・廣瀬由美子編著『授業のユニバーサルデザイン Vol.5』東洋館出版社 2012年所収

村田辰明（むらた・たつあき）

関西学院初等部副校長。日本授業UD学会関西支部代表。
すべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業をめざし、社会科を中心に研究・実践を続けている。

(2016年5月執筆)